

第6戦 FUJIMAKI GROUP SUZUKA GT 300KM RACE 鈴鹿サーキット

予選 10月24日(土)

天候:晴れ コース状況:ドライ

今回の舞台は第3戦以来の鈴鹿。前回は8月の暑さの中だったが、10月も下旬になると暑さもなくなり時おり冷たい風が吹くようになった。しかし天候はまずまずで、朝から大勢のファンがサーキットに駆けつけた。2度目の鈴鹿ということ、さらに第5戦では7位というベストリザルトを獲得しただけに、これまでのデータを生かしてさらに良い結果を残したい。幸いハンディウェイトも24kgと軽量であり、活躍するチャンスは大いにありそうだ。

予選：3位



今回のレースも有観客ではあるものの動線は厳しく区分され、チームスタッフの人数制限、さらには参加者全員がレースの2週間前から毎日症状確認の報告を行うなど徹底した感染予防対策を実施した。またサーキット入場時には検温を行うなどの措置が取られた。

24日朝に行われた公式練習では、いつものように阪口良平がステアリングを握ってコースへ。晴れたり曇ったりでやや冷たい西風が吹く中、セッティングとタイヤの感触を確認しながら周回とピットインを繰り返した。セッション終盤のGT300クラス専有走行枠では小高一斗がアタック。トップから0秒738差の4位につけた。セッション終了後に行われたFCY(フルコースイエロー)テストでは燃料を積んだ状態で阪口がドライブして2番手につけるなど、セッティングは煮詰まってきたようだった。

公式予選Q1は今回も15台ずつ2つのグループに分けて行われ、我々6号車はBグループに区分された。晴れ、ドライ、気温20℃、路面温度28℃というコンディションの14時18分、阪口がコースインしたが、開始早々にヘアピン先で動けなくなった車両があり、赤旗が掲出されてセッションは中断。5分後に残り8分間でセッションが再開された。阪口は3周目に1分59秒153のタイムをマークしたが、9位でこのままではQ1突破はならない。阪口はアタックを続け次の周で1分58秒158へタイムアップを果たし、ギリギリではあったが8位でQ2進出を果たした。

10分間の予選Q2は15時13分にスタート。小高がタイヤを温め最後の4周目に1分56秒156と、トップと0秒318差の3位に飛び込んでセッションは終了。今季3回目のポールポジションとはならなかったが、2列目と好位置を得た。

明日の決勝レースは13時にスタート。連続ポイント獲得はもちろん、チーム初の表彰台を目指して戦う。



ドライバー 阪口 良平



「朝の練習走行は持ち込んだセッティングと最初のタイヤのマッチングが今ひとつで、スリッピーでペースが上がりませんでした。そこでリヤをアジャストして別のタイヤに交換したところ良い感じになりました。FCYテスト時は燃料積んだ状態でもフィーリングは良かったですね。予選では思っていたよりなかなかタイムが上がりませんでした。最後に何とか8位で一斗につなげました。3番手というポジションは勝負権がある位置。前の2台はダンロップタイヤで長い距離はちょっと読めませんが、しっかり食らいついてチャンスがあれば前に行きたいです」

ドライバー 小高 一斗

「第3戦で鈴鹿を走っていてその時の経験もあったので、前回ほど慌ただしくはなかったのですが、走り出してみると持ち込んだタイヤが合っていないようでした。予選はコンディションの違いで、ちょっと足りない部分がありました。タイヤも完璧に路面とマッチしていたわけではありません。公式練習から合わせ込めていければ良かったのですが、それでも(ポールポジションまでの)コンマ4秒は縮められなかったでしょう。でもあとコンマ1秒速ければフロントローに並ぶことができたわけですから、そこは悔しいです。明日の決勝ですが、そろそろ表彰台に立ちたいですね」



チーフエンジニア 田中 耕太郎



「予選3番手は上出来じゃないですか？ タイヤはメーカーの推奨タイヤだったわけですが、この時期の鈴鹿のレースってこれまで開催されてなかったわけで、データがありません。テストもしていないし前のレースは真夏でしたしね。それでも公式練習は最後の最後まで諦めずにセット出しをしていたら、終盤に光が見えてきました。Q1は何とか突破してもらって、Q2は一斗くんの速さが出せました。前の2台に何とか食らいついてマイペースでレースをしますが、3番手だといろんな作戦が採れますしね。そろそろ表彰台に乗って欲しいなと思っています」